●オイラセクチキムシタケ（*Ophiocordyceps rubiginosoperitheciata*）

　オイラセクチキムシタケは、倒木や伐根の内部に生息するコメツキムシなどの甲虫の幼虫を宿主とします。上写真の個体は、伐根より未熟の子実体が伸びており、樹皮の表面を剥がすと、表面近くに宿主であるコメツキムシの幼虫が現れました。

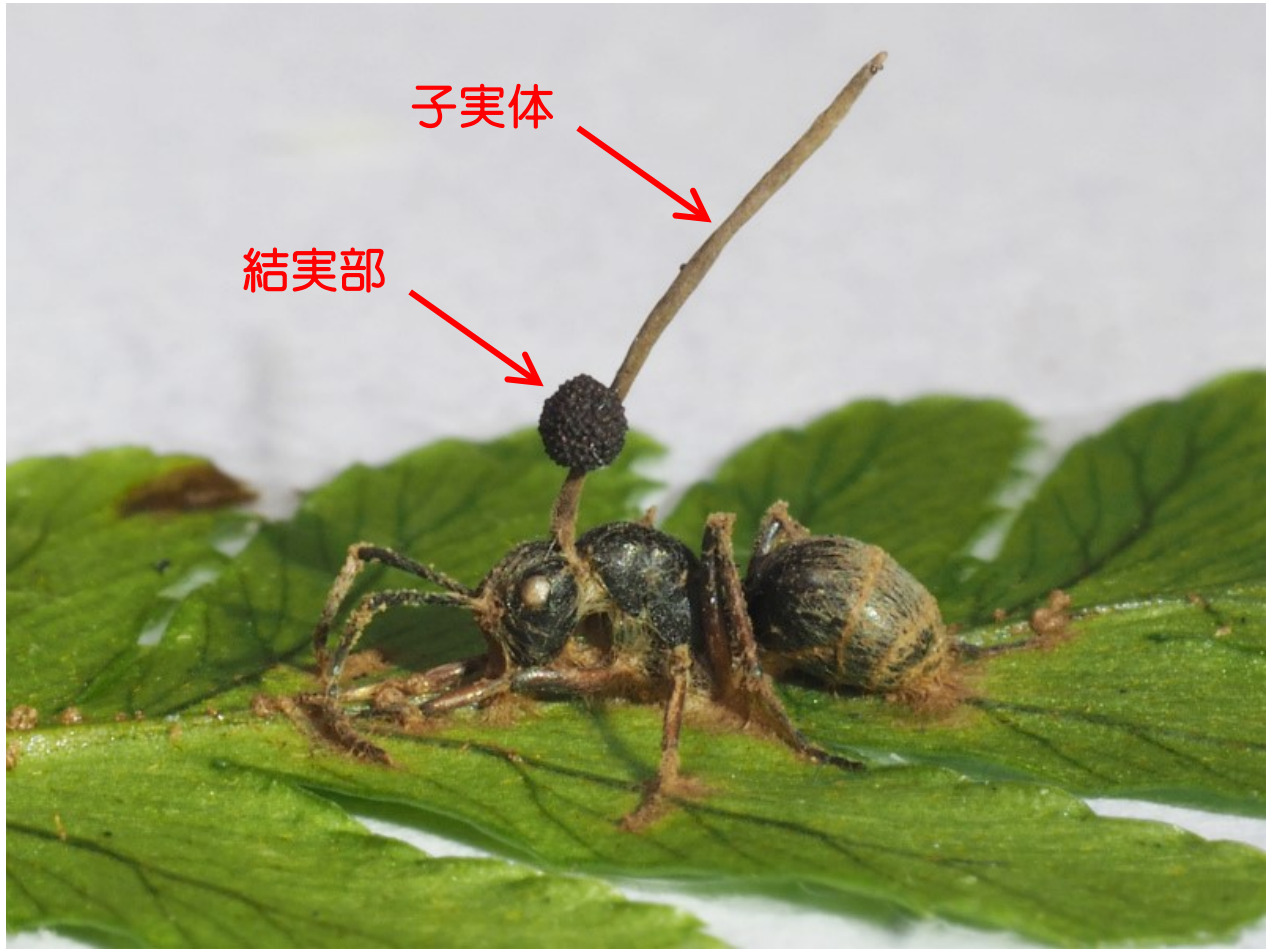
●オイラセクチキムシタケ（*Ophiocordyceps rubiginosoperitheciata*）

宿主であるコメツキムシの周りには菌糸が見られ、頭部から針状の子実体が伐根の外部に向かって伸びています。子実体はまだ未熟の状態で、子嚢殻は形成されていませんでした。今回採取した場所では、冬季に成熟する個体が多いため、これから時期に成熟した個体を多く見る事ができると思います。

●タイワンアリタケ（*Ophiocordyceps unilateralis*）

　タイワンアリタケはチクシトゲアリを主な宿主とします。タイワンアリタケに感染したチクシトゲアリは、湿度の高い場所に生えている植物の葉裏の主脈に噛みついて体を固定し、その状態で絶命します。その後、チクシトゲアリを栄養分として、体内にタイワンアリタケの菌糸が成長し菌核を形成します。湿度や温度などの条件が整うと子実体（いわゆる“キノコ”）を形成し、周辺に胞子を散布します。

●タイワンアリタケ（*Ophiocordyceps unilateralis*）



宿主であるチクシトゲアリの首の付け根から伸びた子実体の柄部に結実部が形成されています。結実部とは胞子（子嚢胞子）を形成する子嚢殻が形成される部位の事で、厚みのある円盤型をしています。この個体は、ちょうど成熟した状態にあり、子嚢胞子を周辺に散布していると思われます。

●タイワンアリタケ（*Ophiocordyceps unilateralis*）

チクシトゲアリが重なり合って体を固定してそのまま絶命し、ここから子実体が伸びた珍しい個体も発見しました。双方の体の首の付け根の部分から子実体が伸び、その中程に子嚢殻が形成されています。

●タイワンアリタケ（*Ophiocordyceps unilateralis*）

通常、子実体はチクシトゲアリの首の部分から伸びてくるのですが、この個体は首の部分だけでなく、尾部の先端からも2本の子実体が伸びていました。これも珍しいです。